



TITLE:

# 認知言語学に基づく構文選択の考察--いわゆる壁塗り交替を事例に

AUTHOR(S):

永田, 由香

---

CITATION:

永田, 由香. 認知言語学に基づく構文選択の考察--いわゆる壁塗り交替を事例に. 言語科学論集 2008, 14: 1-14

ISSUE DATE:

2008-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/88070>

RIGHT:

# 認知言語学に基づく構文選択の考察

## —いわゆる壁塗り交替を事例に—

ながた ゆか  
永田 由香

京都大学大学院 研修員

nagata@hi.h.kyoto-u.ac.jp

### 1. はじめに

本研究では、従来の言語研究で同一の基底構造から派生した複数の表層構造による「構文交替」として扱われてきた事例に対して、認知言語学の言語観に基づき、基底構造を想定しない立場からの考察を行う。結論として、実際の言語資料を調査した上で、「構文交替」と呼ばれる現象は実際の言語使用の場において均等に分布しているわけではないこと、つまり、どちらの表現形で生起するのかに関して言語を使用する主体の何らかの動機付けが関わっていることを主張する。この目的の為に、本稿では以下の現象を始点として議論を進める。(1)の事例は、いわゆる「壁塗り交替」として扱われてきた現象である<sup>1</sup>。

- (1) a. 次郎は壁をペンキで塗った<sup>2</sup>。  
b. 次郎は壁にペンキを塗った。

従来から、何故、この種の現象が注目されてきたのだろうか。(1)の現象で特筆すべきは、全く同じ名詞句と動詞が異なる格助詞の組み合わせと共起し、且つ、(1a)と(1b)が真理条件的に同じ意味を表している点であるとされる。その点で、「特殊」な表現であるとみなされ、言語研究の対象となってきた。

この種の現象に対し、従来の研究、特に語彙意味論のアプローチでは、動詞が持つ語彙概念構造の観点から説明を与えてきた。つまり、動詞がこれらの表現形を決めるという考えである<sup>3</sup>。動詞を絶対的な中心に据え、交替可能な動詞をリストアップしていく研究には限界がある。次節では、本稿で扱う現象の規定を行った後、先行研究に見られる問題点を指摘する。

### 2. 先行研究における規定と分析

#### 2.1 現象の規定

まずは、いわゆる「壁塗り交替」と呼ばれる現象の規定を確認する。(1)の事例に対して従来の研究で指摘されている特徴は、以下のようにまとめることが出来る。

- (2) a. (Zが)XをYでVする<sup>4</sup>。

- b. (Zが)XにYをVする。
- (3) a. 動詞と名詞句を変えずに、格助詞のみを入れ替えることが可能である
- b. 上記の操作の前後で、両表現の実質的意味が変わらない

(2)は(1)の表現形の概略を表したものであるが、(2)の両表現に関して(3)の規定を同時に満たした場合に限り、「壁塗り交替」が成立しているとみなされる。

### 2.1.1 規定の問題点

上記の規定だけでは、当然、(1)の事例の観察としては不十分である。ここで注目したいのは、「実質的意味」とは一体どのような意味かという点である。認知言語学では、言語的意味と言語外的意味とを区別しない。従って、言語主体の解釈の違いまでも含めて「意味の違い」として扱う。その立場では、言語表現に現れる意味の質の違いを認めつつも、そこに断絶があるのではなく段階性をもって広がっているのだと考える。この「実質的意味」を交替現象の判断要素として定めるのであれば、その規定を明確にしなくてはならない。そうでなければ、以下の事例も判断次第では「壁塗り交替」ということになる。

- (4) a. 犯人は被害者の手首を縄で縛った。
- b. 犯人は被害者の手首に縄を縛った。
- (5) a. 総勢三十隻で輪形陣を形成した。
- b. (?)総勢三十隻を輪形陣に形成した。
- (6) a. 花子は昨夜の出来事を満ち足りた気持で思い出した。
- b. 花子は昨夜の出来事に満ち足りた気持を思い出した。

上記の a と b の事例を比べてみた際に、読み手は(4)から(6)にかけて二者の意味の差が次第に広がっていくのを感じるのではないか。こういった事例を一つの基底構造から派生した二つの表現だとみなす立場では、派生物である二つの表現が同じ実質的意味を持つとみなすことに対して疑問がないだろう。しかし実際には、(4)から(6)の例のように、格助詞ヲと格助詞デが生起する表現と格助詞ニと格助詞ヲが生起する表現の間の意味の差は均質ではない。この種の段階性をもった分布をどのように捉えるのかという点が問題である。

本稿では、そもそも基底構造を想定しないという立場から、実際に(4a)の表現形として現れた事例はその表現形として、(4b)として現れた事例はその表現形として扱うべきであると主張する。そのどちらの表現で当該事態を表すかには、言語使用者の事態認知が反映されている。つまり、(3b)で規定している「実質的意味」はかなり限定された狭い意味論においての「同義」を指摘しているのであり、認知言語学の立場からは(1)や(4)-(6)などの事例は単純なパラフレーズとは認められない。

## 2.1.2 規定の精緻化

いわゆる「壁塗り交替」という現象に対する先行研究において、動詞の制約以外に何も制約がないと分析されているわけではない。岸本(2001)は名詞句として具体物を表すものが選択されることが多いと指摘している。しかし、更に詳細な名詞句の制約、そして名詞句に限らない事態全体の制約が存在する。交替というシステムに拠らない本稿の立場からすると、分析すべきは個々の構文が「交替しているようにみえる」時にはどのような条件を伴っているか、という点であり、そのためにもここで一旦、(1)に代表される種の表現がどのような制約を負っているか確認する。以下に、簡略にはあるが制約をまとめた(更なる詳細は永田 2008b)。なお、(7)で参考として挙げた事例はいずれも作例である。

## (7) 「壁塗り交替」現象の制約

## a. 道具・手段と移動物の制約：

(2)のYにあたる名詞句は道具・手段として解釈可能であり、且つ、移動物として解釈可能でなければならない

- (i) 壁を刷毛で塗った。
- ii \*壁に刷毛を塗った。)

## b. 具体物・抽象物の制約：

具体物を示す名詞句の方が抽象物を示す名詞句よりも容認される可能性が高い

- (i) 興奮で頬を染めた。
- ii \*興奮を頬に染めた。)

## c. 影響性の制約：

(2)のXにあたる名詞句は表現全体が示す事態によって影響を受けたと解釈される傾向にあり、その解釈が通らない場合には容認性が下がる

- (i) ?ナイフでりんごを刺した。
- ii ナイフをりんごに刺した。)

## d. 着点句の制約：

(2)のXにあたる名詞句が方向性のみならず着点句として解釈可能でなければならない

- (i) ナイフを警官に刺した。
- ii \*ナイフを警官へ刺した。
- iii ナイフを警官へ向けた。)

## e. 事態全体の制約：

全体の事態からみて(2)のXにあたる名詞句が複数の存在だと解釈される場合には全く別の事態を表しているという解釈が強くなり、壁塗り交替には不適合となる

- (i) ロープで前後の車両をつないだ。
- ii ??ロープを前後の車両につないだ<sup>5)</sup>。)

ある表現が上記の制約を満たした場合、その表現によって言語化された事態は、認知主体の視点の置き方によっては別の格助詞を選択して表すことができる。本稿では、これが、「交替しているように見える」背景ではないかと主張する。なお、上記の制約は必ずしも全てを満たしていなければならないわけではなく、あくまでも典型的な事例にあてはまる制約というだけのことである。

## 2.2 先行研究の概要と問題点

### 2.2.1 先行研究の概要

ここでは、先行研究の代表として語彙意味論的なアプローチからの研究の概要を確認する(cf. Levin 1993, 影山 1996, 由本 2000, 岸本 2001 など)。語彙意味論の立場では、「壁塗り交替」と呼ばれる現象は、その動詞が持つ語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure: LCS)に由来するとしている。

- (8) a. John loaded cartons onto the truck.  
 b. John loaded the truck with cartons. (由本 2000: 162-163)
- (9) a. load<sub>1</sub> : [x CAUSE [BECOME [y BE [AT z]]]]  
 b. load<sub>2</sub> : [x CAUSE [BECOME [y BE [AT LOADED]]] BY MEANS OF [x CAUSE [BECOME [z BE [AT y]]]]

基本的な用法は(8a)であり、(9a)のように動詞の意味構造に統語形式の情報が記載されているとする。更に、語彙的従属化(lexical subordination)によって(9a)は(9b)の下に手段を現す要素として組み込まれ、(8b)の用法が派生するという分析である。

また、岸本(2001)では事態のどの部分に焦点を当てるかによって動詞を「pour 型」「fill 型」「交替型」と分類し、最後の「交替型」にあたる動詞が壁塗り交替可能な動詞であると指摘する。

(10)	〈行為〉	→	〈移動物の動き〉	→	〈場所の結果状態〉
	pour 型		XXX		
	fill 型				XXX
	交替型		XXX		XXX

(岸本 2001:111)

ある行為を行い、それによって移動物がある場所に動き、結果としてその場所が変化する、という一続きの事態の中のどの局面を示すかに着目した点には本稿も同意をする。しかし、岸本(2001)での分析も、やはり動詞の分類へと収束していく。本稿では、交替可能な動詞をリストアップしていくという立場はとらない。

### 2.2.1 先行研究の問題点

先行研究には何点かの問題が挙げられる。先行研究の立場では、交替するかしないかという判定基準が先に用意されており、そこに合致する動詞を分類していくことになる。すると、「撃つ」「結ぶ」のような交替する動詞のリストにない事例が発見されるたびに、分類を修正し、その動詞には新たな意味構造を書き足さなくてはならないことになる。

また、「その動詞が二種類の LCS を持っているから」という理由は交替する可能性を示すとしても、交替の動機とはならない。つまり、実際の表現では必ずどちらかの表現形で表されるのであり、その際には、「どちらとも言えるからどちらでも良い」のではなく「もう一方ではなく、まさにその表現形を言語使用者が選んだ」のである。その表現形を選んだ動機が分からない限り、交替の説明とはならないのではないか。

本稿では、交替というシステム自体を疑う立場にある。「壁塗り交替」とされている二つの表現はパラフレーズではなく、別の動機付けを持つ個々に独立した構文とみなすことが出来るのではないか。次の節では本研究の理論的基盤を導入し、続く節で、その理論的基盤に基づいた仮定とその検証を行う。

## 3. 本研究の理論的基盤

本節では、本稿が理論的に依拠する認知言語学の言語観を導入する。認知言語学の文法部門とみなされる研究としては Goldberg(1995)の唱える構文文法や Croft(2001)が唱える根源的構文文法が挙げられることが多いが、本研究は、より認知言語学の本質的な言語観を反映している Langacker(2005a, 2005b)にその基盤を置くものとする。Langacker(2005a)では、構文観を以下の12項目のようにまとめている。

- (11) i 規則よりも構文こそを記述すべきである
- ii この理論は非派生的(単層的)な理論である
- iii 語彙と文法とは構文の連続体をなしている
- iv 構文とは形式と意味の対応物である(シンボリック構造の集合体)
- v 情報構造は構文的意味の一側面として理解される
- vi 各構文はネットワークの中で関連づけられる(カテゴリー化)
- vii 規則性は具体化された事例とスキーマ的な構文から捉えることができる
- viii 抽象度の違いはあるにせよ、具体事例とスキーマ的な構文とは共通の基本的特徴をもつ
- ix 言語知識は膨大な構文を含み、その大部分は特異的(idiosyncratic)である
- x 特異的な構文を捉えられる理論は、特異性の低い規則的な構文も捉えることができる
- xi 容認性は構文に課せられる制約の問題である
- xii 合成は単層化(unification)によってもたらされる(integration)

(i)-(ii)は、深層構造と表層構造という二層の構造を仮定していた生成文法へのアンチテーゼであり、(iii)-(v)で示す、統語論、意味論、語用論を別個のものとして扱うのではなく、同じ土俵で一貫して扱おうとする姿勢と併せて、認知言語学の言語観の基盤をなす。そして、(vi)-(viii)においてそれぞれの構文の関係はカテゴリー化によって捉えられることを示し、(ix)-(x)では、Fillmore et al.(1988)などの意識と同じく文法現象の周辺(例外として無視されてきたもの)から中心へという流れが見える。また、(xi)は構文の容認性、(xii)では合成について指摘する。

本稿は以上の構文観を踏まえて、次節から実際の事例を分析していく。Langacker の指摘の重要な点は、次の点だろう。この言語観においては、あらゆる大きさの要素を同じ場で扱うことが出来る。構文に偏重するのではなく動詞にも同時に多義を認め、その重なりで言語表現を捉えるのである。また、構文の間の関係はカテゴリー化で関連付けられるとするとともに重要である。表現の鋳型の段階性は異なるものの、動詞も「構文」であるため、動詞と構文の関係もカテゴリー化で捉えられるとするのである。

また、Langacker では構文をシンボリック構造の集合体とみなし、シンボリック・ビュー(symbolic view)に基づいた分析を徹底している。本稿もこの立場に沿い、形式であるところの格助詞と名詞句、動詞の組み合わせに対し、意味として話者の事態の認知様式が対応する形での記述を試みる。Langacker の分析は事態認知の記述や言語現象を解釈する際の動的な側面に重きを置いており、事態をどのように解釈するかによって表現形の選択が変わるとする本稿にとっては、多くの構文文法の流れの中でも特に支持できる理論である。

#### 4. 構文選択の仮定と検証

本研究では、認知主体が外界の事態をどう解釈し、表現しようとするかによって、(2)で示した二つの表現形のどちらかが選ばれると想定する。つまり、ひとつの基底構造から二つの統語形式が派生するのではなく、そもそも動機付けの違う二つの構文があり、そのどちらで表現するかを認知主体が選択すると考えるのである。そのため、それぞれの表現形に対して、それぞれの意味規定をしなければならない。なお、意味論的な定義で用いる図法は Langacker(2005a)に準拠するものとするが、その際、日本語の分析に対応できるように多少の改変は行う。

##### 4.1 事態認知に基づく意味規定

###### 4.1.1 事態認知：「次郎はペンキを壁に塗った」

まずは事例を確認するが、(2b)にあたるこの表現形では、実際の言語文脈において以下のような事例が観察された。なお、実際にコーパスに現れた事例は(12a)(13a)であり、(12b)(13b)は参考のために格助詞を入れ替えて提示したものである。なお、使用したコーパスや採取事例の詳細については 4.3 節で行う。

- (12) a. 白い服に緑色の帯をしめた。  
 b. 白い服を緑色の帯でしめた。
- (13) a. 眼鏡を鼻のつけ根に押し付けた。  
 b. 眼鏡で鼻のつけ根を押し付けた。

いずれも、前節までの規定を満たすものである。(12a)に関して言えば、「緑色の帯」とは「しめる」行為をする上での手段となるものであり(=7a)、「白い服」は「しめ」られることによって腰の位置で布の余りが絞られるという影響を受け(=7c)、さらに、帯の着点となるべき場所である(=7d)。両者は共に具体物であり(=7b)、事態全体を見た場合に「白い服」が複数存在することを含意する解釈は優勢ではない(=7e)。これらの条件を満たしているため、(12a)はあたかも(12b)と言い換え可能と判断され、「壁塗り交替」をすると結論付けられるのである。

次に、この格助詞ヲと格助詞ニとの組み合わせからなる表現形を図示しよう。図を提示する前に、簡単にではあるが図法の説明をする。四角の中に円が書かれているものが名詞スキーマ、円の下に丸で囲まれたGがあり、円とそのGが結ばれているものが名詞句スキーマ、円に接して矢印が円から外側に向かって書き込まれているものが動詞スキーマである。図の上段が構文スキーマ、下段が個別の動詞スキーマである。それぞれの要素の対応関係は破線で示され、構文スキーマ内から動詞スキーマへと向かっている破線の矢印はカテゴリー化の働きである。なお、図は全てシンボリック構造の中の音韻構造を省略したものである。

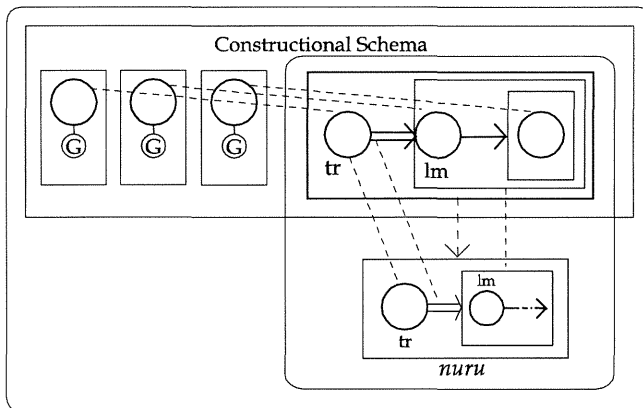


図 1

図の中の要素の出現順は、実際の語順と対応している。従って、これを冒頭に挙げた(1b)の例にあてはめると、名詞句は左から「次郎」「ペンキ」「壁」となる。動詞のもつ「塗る」



という行為は、構文スキーマに統合されることによって、その行為を通してランドマークである「ペンキ」が着点である「壁」に位置変化を起こすことを示す。

先に検討した制約と合致しない場合(つまり、名詞句や事態解釈に一切条件を加えない場合)、この構文スキーマには「壁塗り交替」とは到底言えない事例もが合致することになる(例えば「お年寄りに席をゆずった」や「恋人に手紙を送った」など)。構文スキーマがかなり具体化された段階で、はじめて、「壁塗り交替」に合致する事例と認められるのである。

#### 4.1.2 事態認知：「次郎がペンキで壁を塗った」

続いて、格助詞デと格助詞ヲの組み合わせからなる表現形を確認しよう。以下の事例も先ほどと同様に、a にあたる表現が実際の言語文脈で使われていた表現である。

- (14) a. 人差し指で天井の辺りをさした。
- b. 人差し指を天井の辺りにさした。
- (15) a. 高ぶった感情で胸を満たした。
- b. 高ぶった感情を胸に満たした。

(14)の詳細を見ていこう。「人差し指」は「さす」行為の手段となるものであり(=7a)、具体物である(=7b)。事態全体を見た場合には、「天井の辺り」という場所が部屋の中に複数存在するとは考えにくく、(7e)に合致する。問題は、「天井の辺り」が具体物ではなく、「人差し指」がそこを着点として移動するわけではないというところである。次の節で詳細を検討するが、「次郎がペンキで壁を塗った」タイプの事例は(7)で確認したような典型からは外れる場合が多い。(15)の場合も、「感情」と「胸」は共に抽象物であり、「胸」の解釈に容器のメタファーを利用することによって、はじめて、容認性が保証される。これは、(2a)にあたる表現(=(Zが)XをYでVする)のそもそもの容認性や出現頻度が低いということを指しているのではない。実際のところ、(2a)タイプの方が(2b)の表現形(=(Zが)XにYをVする)よりも「壁塗り交替」現象としての出現頻度、および「壁塗り交替」現象としての容認性は高い。(7)で確認した制約は、あくまでも「壁塗り交替」をしているように見える典型例としての制約なのである。

では、この表現形の事態認知を下記のように図示しよう。図 1 と同様、要素の出現順と語順は対応しているので、(1a)にあてはめれば名詞句は左から「次郎」「ペンキ」「壁」となる。「塗る」という行為が構文スキーマにカテゴリー化されることによって、ランドマークである「壁」が状態変化を起こす事態を表すことになる。

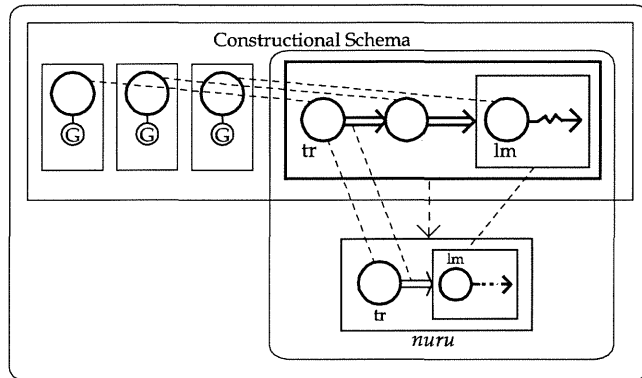


図 2

#### 4.2 両表現の比較と選択

本稿では、二つの表現形のそれぞれに個別の認知図式を想定した。それは、話者は外界の事態をどう言語化したいかを判断し、その判断に基づいて表現形を選択すると仮定したからである。これは、動詞が複数の語彙概念構造をあらかじめもっていて、それが複数の統語形式を派生するという分析とは本質的に異なる。本稿の拠って立つ言語観からすれば、構文は構文として事態の鋳型の意味をもっていて、それが個々の動詞の意味をカテゴリー化することで、実際の言語文脈では個別の表現の意味が生まれると考えるのである。

ここまでで検討した事例で、容認性が低い表現とみなされてきたのは主に格助詞ヲと格助詞ニの組み合わせからなる表現形(=図1)である。この特徴に関して、図1、2を比較することで一つの仮定が得られる。図2において、三つの参加者のうちの一つは、トラジェクターとランドマークに挟まれる形になっている。これは、単に二つの参加者を仲介しているだけの参加者と考えられるだろう。エネルギーを伝達しさえすればいいのである。そのため参加者として選択できる存在の規定はゆるく、より広い事態を言語化できると考えられる。一方の図1では、三番目の際立ちの参加者は、ランドマークである参加者が位置変化を起こした状態を示している。そのため、この参加者として取ることが出来る候補の範囲が狭いと考えられるのである。この仮定を、次のように示す。

##### (16) 構文選択の傾向に関する仮定：

「(Zが)XをYでVする」にあてはまる表現形で生じた文章の方が、当該事態に対する参加者の関与の度合いが低い(=参加者として取れる対象の範囲が広い)。そのため、実際の言語使用の場では「(Zが)XにYをVする」よりも「壁塗り交替」をするとみなされる事例が多く出現する。

端的に言えば、実際の言語資料を調べてみた場合には、いわゆる「壁塗り交替」をすると判断される事例は、「(Zが)XをYでVする」の表現で現れることの方が多いのではないかということである。この仮定は次の節で検討する。

また、この図式が語順を反映するという点に関しても、語順の自然さと事態の入れ子構造の自然さとの対応から妥当性が示されている(cf. 永田 2008a)。語順の反映という点も、この認知図式で示す利点の一つとして挙げられるだろう。

### 4.3 仮定の検証と考察

#### 4.3.1 検証の対象と手順

本調査は『CD-ROM 版 新潮の 100 冊』を利用し、文体差を考慮に入れ、現代に近い複数の時代の男女各一名の作品、約 41000 文を用いた。調査に用いたのは KH Coder<sup>6</sup>である。「NP ヲ NP デ V」「NP デ NP ヲ V」(=(2a))にあてはまる事例を採取したところ、947 例の事例が得られた。同様に「NP ニ NP ヲ V」「NP ヲ NP ニ V」(=(2b))を採取すると、14210 例が得られた。全ての事例を検討することは現実的ではないため、その中から、各作者につき 100 例ずつ無作為に取り出した。その 600 例のうち、用をなさない事例を取り除いた結果、233 例の事例が得られた。データの内訳は表 1 の通りである<sup>7</sup>。

表 1 データの内訳

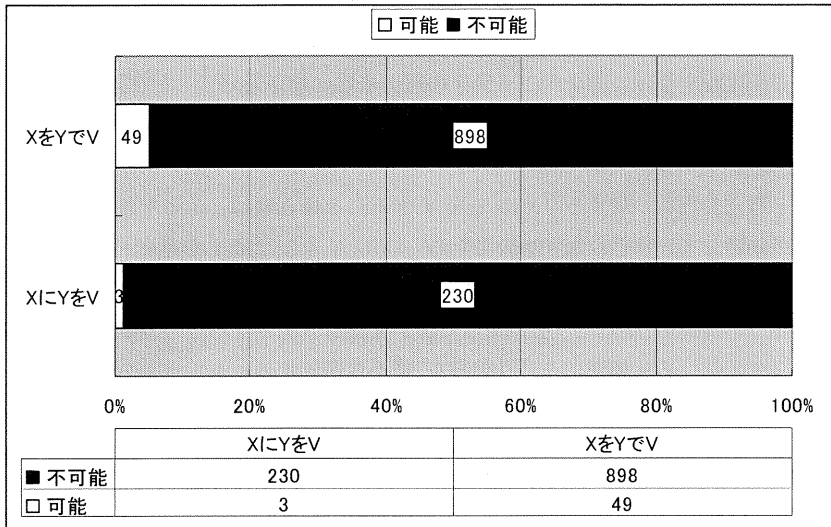
作者	遠藤	三浦	阿川	曾野	椎名	塩野	合計
年代	1960	1960	1970	1970	1980	1980	—
性別	男	女	男	女	男	女	—
(2a)タイプ	215	99	271	137	155	70	947
(2b)タイプ	50	36	37	32	50	28	233

こうして得られたデータに対して、いわゆる「壁塗り交替」をするかどうかのテストをかけた。つまり、「次郎は壁をペンキで塗った」という形で生じた文章を「次郎は壁にペンキを塗った」とした上で、その文章の容認性を判断したのである。「次郎は壁にペンキを塗った」という格助詞の組み合わせで生じたものについても同様である。なお、今回の調査では語順は分析要素として扱っていない<sup>8</sup>。

#### 4.3.2 検証の結果と考察

上記のテストをしたところ、以下の結果が得られた。表の見方についてだが、上部にある「可能」「不可能」とは、例えば「次郎は壁をペンキで塗った」の格助詞を入れ替えて「次郎は壁にペンキを塗った」とした場合に容認されるかどうかである。容認されるものは、「壁塗り交替」をしているように見ることが可能ということで、「可能」と表示をした。逆に容認されない事例に関しては、「不可能」と表示した。

表 2 テストの結果



次に、グラフの左に示された項目だが、これは、実際のテキストの中でどの表現形をもって生じたかということである。先の(12a)の事例であれば、塩野七生の著作の中で「XにYをV」の形で生じた事例なので、下側の棒グラフに部類される。且つ、これは「壁塗り交替」をしているように見ることが可能なので、左端に示されている三例の中に分類される。

まずは全体として、「壁塗り交替」をしているように見ることが可能な事例は非常に少ないことが分かる。このことから、文法研究では手厚く扱われているこの表現が、実際の言語使用においてはさほど用いられない表現であることが指摘できる。特に、格助詞二と格助詞ヲの組み合わせからなる文の事例の総数は膨大だが、2節で確認したようなさまざまな制約でふるいにかけると、残るのはごく一部だけとなるのだ。

この分布を統計的な視点から見れば、以下のことが言える。

- (17) クロス集計を行った結果、この分布状態は有意水準1%において有意であった ( $\chi^2(1)=6.753$ )。

つまり、何らかの要因の関与がないのに表2のような分布結果になる可能性は、1%に満たないと指摘できるのである。

では、この比率の差はどこから来るのだろうか。比率の差を見てみると、「XにYをVする」のデータで「壁塗り交替」をしているように見える観測度数が、期待度数に比べて低いことが分かる。つまり、先の仮定(=16))での推測と違わず、実際の言語使用の場においても「XにYをVする」の方が「XをYでVする」よりも「壁塗り交替」とみなされにくいことが確認できたの

である。これは、動詞だけを見ているとは分からない事実である。実際の生きた文脈において、動詞を含めた文の要素がどのように生起しているかを観察して、はじめて、このような分布が確認できるのである。

図1と図2を比較すると、図2の方が構文の持つ事態の鎖が長いことが指摘できる。「壁」にあたる名詞句は、単なる着点としての場所ではなく、ある対象と接触した後に状態変化を起こす。認知主体が「XをYでVする」を選ぶ時は、この動機付けがあつて他でもない「XをYでVする」を選ぶと考えられる。対する「XにYをVする」を選ぶ時は、ある対象が着点に移動した時点で事態が終結しているとみなす場合である。「XにYをVする」を選ぶということは、認知主体の中で事態の鎖が短い方が適切だと判断されたということであり、それを統語操作によって変形したところで、既に完結した事態に更なる状態変化を含意させることは難しい。それに比べ、事態が既に含意している状態変化という局面を、後から削除することは容易であると想定できる。この場合は、事態のどの側面にプロファイルをあてるかという問題であり、事態の末尾に更に局面を付け足すのとは質的に異なるのだと考えられるからである。

## 5. まとめ

以上、本稿では日本語のいわゆる「壁塗り交替」とされてきた現象を取り上げ、個別の表現形に対しての分析の後に比較検討し、ひとつの仮定を得た。それは、「XにYをVする」の表現形の方が「壁塗り交替」をしているとみなされにくいという仮定である。実際に言語資料を用いて使用状況を調べた結果、その仮定が間違っていないことを確認した。更に、事態認知の観点から、どうしてそのような調査結果が出たかを考察した。結論としては、「XにYをVする」が選択される場合は、認知主体がそもそも外界にある事態を「ある対象が着点に移動した時点」で区切って見るのが妥当だと判断した場合であり、その種の事態の末尾に更に状態変化を付け加えることは困難であることを指摘した。

## 注

- 1 便宜上、本研究では(1)に代表される表現形を「壁塗り交替」と称するが、あくまでも便宜上のことであり、「交替」というシステムを支持するものではない。「交替」というのは一方の形式を基底構造とし、そこからもう一方が派生するという考えに基づく概念であり、本稿の言語観とは本質を異にするものである。
- 2 本稿に掲載する事例は、特に断りがない限りは『CD-ROM 版 新潮の100冊』から取った事例に対して、表記の関係上見やすくしたりテストを掛けたりしたものである。
- 3 岸本(2001)では、壁塗り交替可能とされる動詞のリストを以下のように挙げている。  
「取りつけを表す動詞：[塗り込み]塗る，張る，葺く，からめる/からむ/からまる，和える，染める/染まる，飾る；[積み上げ]盛りつける，山積みにする，山盛りにする；[放散]ちりばめる，散らかす/散らかる，にじむ，まぶす，敷き詰める；[詰め込み]詰める/詰まる，満ちる，満杯になる/満杯にする，溢れる，埋める/埋まる，混む，立て込む，充滿する，つかえる，いっぱいになる，満たす；[光の放出]輝く，光り輝く；[振動]響く，鳴り響く；反響する；[開花]満開になる；[その他]刺す，巻く」岸本(2001: 105-106)

- 4 日本語では必ずしも格助詞ガの明示が必須ではないので、本稿では議論の明確化のために格助詞ガで標示される名詞句を「(Zが)」と括弧つきで表示することにする。
- 5 表現としては容認されるが、iの事態と全く同じ事態としては解釈できない。
- 6 KH Coder とは樋口耕一氏によって製作された内容分析(計量テキスト分析)もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトウェアである。詳細及び配布は <http://khc.sourceforge.net/>にある web サイトを参照のこと。
- 7 採取したデータに関して、年代や男女差による偏りは見られなかった。
- 8 日本語が比較的語順の入れ替えが自由だとはいっても、語順次第で文章の容認性が変わってしまうことは既に指摘されている(永田 2008a)。
- 9 当然のことながら、分析対象が小説というジャンルに偏っていることは問題だろう。種類の異なるテキストを対象として同様の検証を行うことは、今後の課題である。

#### 参考文献

- Croft, William. 2001. *Radical construction grammar: Syntactic theory in typological perspective*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles J., Paul Kay and Mary Catherine O'Connor. 1988. Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: the case of let alone. *Language* 64: 501-538.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago/London: The University of Chicago Press.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点』東京: くろしお出版.
- 岸本秀樹. 2001. 「壁塗り構文」, 影山太郎(編)『日英対照 動詞の意味と構文』100-126. 東京: 大修館書店.
- 国立国語研究所. 1997. 『日本語における表層格と深層格の対応関係』, 国立国語研究所.
- Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami. 2004. *Functional Constraints In Grammar: On The Unergative-unaccusative Distinction*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2000. A Dynamic Usage-Based Model. In Barlow, Michael and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based Models of Language*. Stanford: CSLK. 1-63.
- Langacker, Ronald W. 2002. *Concept, Image, and Symbol. The Cognitive Basis of Grammar 2<sup>nd</sup> edition (Cognitive Linguistics Research Vol.1)*. Berlin-New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2005a. Construction Grammars: cognitive, radical, and less so. In Francisco J. Ruiz de Mendoza Ibáñez and M. Sandra Peña Cervel (eds.), *Cognitive Linguistics. Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*. 101-159. Berlin-New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2005b. Integration, Grammaticization, and Constructional Meaning. In Mirjam Fried and Hans Christian Boas (eds.), *Grammatical Constructions: Back to the Roots*, 157-189. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

- Levin, Beth. 1993. *English verb classes and alternations*. Chicago: University of Chicago Press.
- 永田由香. 2008a. 「構文文法に基づく日本語構文の体系的記述の試み」『日本認知言語学会論文集』8: 377-387. 日本認知言語学会.
- 永田由香. 2008b. 「日本語壁塗り交替の分析」, 児玉一宏・小山哲春(編)『言葉と認知のメカニズム 山梨正明教授還暦記念論文集』117-128. 東京: ひつじ書房.
- 山梨正明. 1993. 「格の複合スキーマモデル」, 仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』39-67. 東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』東京: ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.
- 由本陽子. 2000. 「語と概念構造」『日本語学』19(5): 158-168. 東京: 明治書院.

#### 参考資料

阿川弘之『山本五十六』, 遠藤周作『沈黙』, 椎名誠『新橋烏森口青春篇』, 塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』, 曾野綾子『太郎物語』, 三浦綾子『塩狩峠』, いずれも『CD-ROM 版 新潮の100冊』.